

瀬戸内晴美長編選集……第七卷

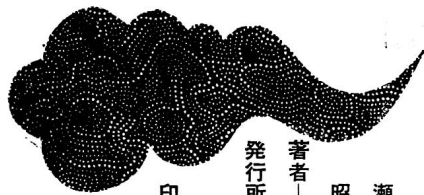
恋川

恋愛学校

戀愛學校

瀬戸内晴美長編選集 第七卷

講談社



瀬戸内晴美長編選集 第七巻―恋川・恋愛学校

昭和四十九年六月二十四日第一刷

著者―瀬戸内晴美 造本―杉浦康平十海保透 発行者―野間省一

発行所―株式会社講談社 東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一二二

電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表) 振替東京三九三〇

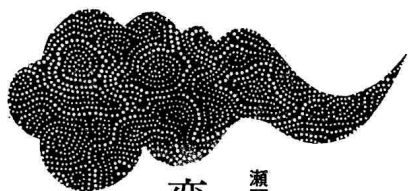
印刷所―豊国印刷株式会社・株式会社興陽社 製本所―黒柳製本株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えいたしません。

©瀬戸内晴美 昭和四十九年 Printed in Japan



瀬戸内晴美長編選集——第七卷



瀬戸内晴美長編選集 第七卷 目次

恋川

5

恋愛学校

307



恋
川

恋の重荷

正月は、人形まわしが運んでくるものと、幼い頃の私は信じこんでいた。

私の故郷の阿波の徳島では、正月元旦の朝早く、門づけに人形まわしが軒毎を訪れる慣わしがあった。

戦災前の焼けない徳島の町は、女の眉のようになだらかな背を見せた眉山の麓に横たわった、いつでも霞に包まれたようなのかに物淋しい城下町であった。道路をへだてて、向いの家の人と少し声を高めれば話しあえるようなせまい路に、霜柱をとかす新春の陽光が爽やかにさしそめると、まだ年賀の人の足音もしない、いつもよりは静かな戸外に、ひたひたと足音をたて彼等は朝陽の中から湧き出てくる。

ほんと、小鼓の音を戸口で爽やかにひびかせるのは二人づれの門づけで、小ぶりの柳行李を風呂敷で背負った男の横に、才蔵がわりのお供が小鼓をかかえてひかえている。

「おめでとうござあい」

門口に家人が出ていくと景気のいい声をはりあげ当然のように玄関に入ってきて、上り框に背の荷をおろす。家によつては縁起をかついで、彼等を座敷にあげ、裏じろや、注連や、鏡餅で賑やかに飾りつけられ、天井から下っている恵方棚の下に導いていく。

綺の着物の上に、水色や白の糊の萎えた水干をつけて、

男は風呂敷包みの中から柳行李を取り出し、その中に二つに折り畳まれてつめこまれていた人形を取り出す。

お供が小鼓を打ち、人形まわしが口語りで三番叟や夷人形をまわしてみせる。わずかな祝儀と餅が彼等に返礼されると、家の者たちに賑やかに送り出されて帰っていく。

子供たちは、家で見ただけでは満足しないで、たいいてい、ぞろぞろ彼等の後を追った。

家によつては、玄関で、人形をまわさせるところもあったが、正月のことなので、めったに断りをうけるようなことはなかったらしい。

もっと簡単な人形まわしはひとりで作ってくる。

はじめから着ている水干も洗ったとは名ばかりの萎えきつたものをだらりとひっかけ、胸に白い木綿のずだ袋をかけ、人形ひとつ片手に門口に立つ。いきなり、

「おめでとうござあい」

と声をはりあげておいて、待ちかねていたその家の子供が先ず飛びだしていくと、持っている人形を、大げさに、軀の前でふり動かして歌いながら舞わしはじめる。

「西の宮のおいべっさん……えべす三郎左衛門のじょう。寅の一天まだ卯の刻に、なるやならずに、ご誕生なあされ

た、なされ、なされ、なあされた……」

啞がれ声につれて、赤い顔にひげをつけた剽軽な顔のえ

びす三郎は、両手、両足をぶらぶらと振り、むやみに首をせわしなく動かして愛嬌をふりこぼす。

ほんの一、二分の門づけを終ると、わずかの祝儀や餅をもらい、ずだ袋になげこんで、次の家へまわる。

子供の頃の私は、彼等の小鼓の音や、おめでとうござあいの声を聞くと、雑煮を食べている途中でも、箸をなげだして誰よりも早く門口へ駆けだしていった。

正月の門づけたちは、普段は近在の百姓をしていて、正月だけ、そんな衣裳をまとい、俄仕立ての人形まわしになって、稼ぎに町へ出てくるのだった。顔は野良仕事の陽にやきこまれ、人形をあやつる手は太く節くれだっているのも当然だった。

人形まわしがやってきて、「西の宮のおいべっさん」と、歌って通ったあとから、ようやく、町のあちこちに追羽根をつく音が聞えてきて、通りには年始の人々の、昨日とはちがって改まった、紋付姿の晴々しい顔が通りはじめる。

物心ついた頃から、こうして人形まわしの来る正月を年毎に迎えたせいか、私は今でも正月に逢う度、ふと、耳の奥に、のどかな彼等の節まわしが耳をかすめてくるように思う。と、たちまち私の顔の中には、赤いおどけたえびす人形の顔に重って、真白に照りはえたつややかな頬に、黒髪も豊かに結いあげ、重そうにびらびらの銀簪を額にゆらめかせている美しい木偶人形の女の顔が重ってくる。

黄昏が薄紫色に滲み、黒いこうもりの影が、川岸にびつしり並んで影を落した藍倉の白壁のあたりをとびかう頃、

町角から町角へ、冴えた拍子木の音がひびいていく。その音を聞きつけたとたん、稚い私はひとり遊びのおはじきも、お手玉も姉さま人形もなげだして、あたふたと表へとびだしていく。

拍子木の音を便りに、とある町角へたどりつくと、もう私のような子供たちが、わらわらと四方から駆け集ってきて、軒下に一かたまりになって陣どっている。

赤ん坊を背負った老婆や、買物婦りの野菜をさげた主婦や、使いの途中の小僧なども、子供たちの群にひとり、ふたりと寄り集ってくる。

拍子木を打ちながら、人形まわしの男が帰ってきて、「さあ、ほなら、そろそろ、はじめるとしようかい」とつぶやく。拍子木を腰にぶらさげておいて、男は肩に

ふりわけにしてかついで歩いてきたつづらのような仕込み箱を二つ、自分の前に離して並べ、それぞれの上に二本の竹を立て、竹の上に竿をさしわたす。竿は、その荷をふりわけにしてかついできた物を使っていた。

子供たちは期待にあえいで、みんな口を薄くあけ、人形まわしが早く、人形を出さないかと彼の手許に視線を吸いつけられている。それと知っていて、人形まわしはわざとのように、なた豆煙管で一服吸いつけてみたりして子供たちの気持を焦らす。

「おっさん、早うあけて」

「なあ、早う見せてんか」

足ぶみしながら子供たちがさがむと、わざと人形まわし

は、そしらぬ顔をして、

「さむらいの子は腹がへつてもひもじゅうない」

など、淨瑠璃の文句を節をつけて口ずさんで子供たちをからかいながら、ようやく、つづらの前に腰をかかめるのだった。

縦長の箱の中には、ひきだしがついていて、その中に人形芝居で使う木偶人形が、衣裳をつけたまま三つ折りにされて入っていた。

ひとつずつ取り出された人形が、さしわたされた竿に片はしからひっかけられていく。帯に、鈎でもつくられていくらしく、人形は、腰のところで金棒にとりついた人のような形でちゃんと収まるのだった。

赤い衣裳の、簪も重たげな赤姫姿の「笹屋」か、水色と赤の麻の葉模様の着物に黒緇子と緋鹿の子の帯を締めた「娘」の白い派手な顔が見物たちを見下すと、いつものことなのに、子供たちの中からは軽いため息が洩れる。人形の白いなめらかな頬は、黄昏のうすら陽をそこ一点にかきあつめたように、ほんのりと微光を放って輝いている。

男はわざとそっけない態度をつくりながら、ちよつと間を持たせて、つぎつぎ人形をひきだしては、竿の上に並べていく。

黒緇子の衿のかかった水浅黄の小紋の着物に、紫のふきをなまめかしくのぞかせた眉の青い「老け女形」や、かっ

憎らしい赤ら顔にこわい鬚をはやした意地悪面の「与勘平」の首など、せいぜい、三つか、四つ並ぶと、もう竿の上はいっぱいになる。

いつのまにか、子供たちの背後には大人の垣がぐるりととりまいていく。それから男はおもむろに、子供たちの手にひとつずつ、棒飴を渡していき、飴代を受けとる。

「飴買わんやつは見たらあかんで、ぜに出さんと見るんやったら、ぜに出して見る人間が阿呆になってしまふやろ。さ、買った、買った、飴買った」

一通り飴をゆきわたらせてしまつてから、男ははじめて人形のひとつを取りおろし、自分の手にしっかりと持つ。「へ切つても切れぬ恋衣や、元の白地をなま中に、お染は思い久松が、跡をしとて野崎村、つつみ……チンチン、チンチン、チンチン、チンチン、チンチン、チンチン、ツツン、テレトン……ぶたいにようようと、梅を目あてに軒のつま……」

人形まわしは首をふりながら、ひとりで淨瑠璃を語り、口三昧線で合の手をいれ、手は人形を遣うのである。

子供たちは、男の語る淨瑠璃の文句も意味もわからないまま、口三昧線に、しらずしらずうなずいたり、首をふったりして人形に見惚れてしまう。子供たちにとっては、人形が動いてさえいいのだった。白い美しい顔の娘や姫はみんなやさしい女、可哀そうな女であり、若い美しい女が、何やら悲しそうに泣いたり、もだえたりするのを見るだけで、胸がきゅつとせまってくる。

白い男の首が目をつぶったり、口をあいたり結んだりすれば、娘に恋されている男と思い、憎さげな顔の首が、目をひきむけば、恋の邪魔者の悪人と決めこんでしまう。やさしい「老け女形」は、いつでも若いふたりの恋の理解者で味方と決っていた。

物語も筋もわからなくて結構だった。長い人形芝居のさわりの二所か三所を見せてから、人形まわしのその日の演技はおしまになる。

「今日のはよう語れとったなあ」

「ほんでも、三味線の手がまちごうとりましたでよ」

大人たちは口々に一こと感想をのべあつては、子供たちより早く散っていく。

黄昏はいつそう濃くなり、こうもりの影がひたひたといや増してくる。

鈍い軒燈のともりはじめたせまい道を、急に空腹を覚えて子供たちはあわてて、それぞれの家に駆けもどっていく。

何歳頃から、そうして町角の人形まわしを見つづけていたものか、今の私には記憶もさだかではなくなつた。

三つ四つの時には、もうあの白いなめらかな人形の顔が臉にやきつき、夕陽に映えるびらびら簪や、人形の口の中の鮮かな赤さが目にしみついていたのではなかったか。

その頃の徳島の町では、浄瑠璃の一節の語れないような大人はなく、日常のことばの中にも浄瑠璃の文句がしみとおっていた。

「ほなら、まあ、へんしも早う去てさんじまひよ」などいって、思いついた用事のため腰をあげる老婆などがいくらでもいた。

「人間としたことが」とか、「嫁としたことが」などということばも日常の会話に使われていた。

芝居といえば、人形芝居をさしていた。同時に「木偶を観よう」ということも人形芝居を意味していた。

そばやの出前持ちも、左官屋の壁塗りも、自転車の上や、壁の前で、「さわり」の一節を口ずさんでいた。

人形芝居を観る日は朝から、重箱弁当を用意して、ひょうたんに酒を詰め、櫛の中でゆっくり、食べたり呑んだりしながら、中には舞台に背をむけたまま、終日愉しんでくる者もあった。

人間の生活におこる喜憂の型は、すべて浄瑠璃の中にその原型を探しだすことが出来ると思ひこんでいた。隣の不幸も、わが家の不和も、浄瑠璃とおんなじだと、慰めたり、あきらめたりしていた。

人間の生活には、昔から哀しいことのほうが多く、人はたいいて、いうにいけない苦労辛苦を、じいっと胸の中に押しつつんでこらえて生きていくものだというのが、阿波の女たちの人生観になっていた。

義理と人情の板ばさみの時は、人形たちのするように、自分を殺して義理をたてた。

それでも恋は……思案の外のこと。南国の陽に育った早熟な阿波の女たちは、押え難い熱い血を生れながらに伝え

られてゐるのかして、思いがけないはげしい恋の噂は、いつでも、あの町やこの町で囁かれていた。

二十ちかくまで、徳島から一歩も出たことなく育った私の中にも、こうした故郷の女の血は、色濃く流れてゐるのさう。

故郷の町を出て、はや二十年の余りも異郷にさまよいつづけてきたこの頃、ふと未明のおぼろな夢の中などに、今はもう焼けはててなくなつた川端の白い藍倉や、こうもりの舞うせまい道幅や、黄昏の町角に人形まわしが遣つてゐる人形の白い顔などが浮びあがつてゐるのはどうしたことだろう。繰りかえし繰りかえし、懲りずまの愚かな恋にまづきながら、いつのまにか人生の坂も上りつめてしまつた生涯の残照の中に、長い間忘れていた人形の佛が水の中央から揺れ上ってくるように浮んできて居並ぶのである。

稚い私が息をつめ、人形まわしの手がつづら箱の中から人形を取り出すのを見守つていた頃、私は無造作に折り置まれた人形が、人形まわしの腕の中で、ばらりと着物の裾をひろげる度、思わず、小さな吐息を洩らしたのを思い出す。乱暴に畳まれて、窮屈そうに箱に押しこめられていた人形が如何にも無惨に思え、さぞ、くつろいだことだろうと思つたからのため息だった。その頃の私の目には、薄汚い人形まわしのかつぎ箱が、人形たちを押しこめてゐる暗い牢屋のように思われていた。

はじめて能の『恋重荷』を観た時、私は恋の荷が、金襴の美しい錦でつまれてゐるのを見て、はつとなつた。何

故、そういう連想が浮んだのか、そのまばゆく飾られた舞台の恋の重荷から、私はもう何十年も私の胸に眠りこんでいた、故郷の町角の人形まわしの古ぼけたふりわけ荷の箱を思い出したのだ。

あの汚い箱の中から、つぎつぎ取り出された人形たちが語り見せてくれた数々の恋の物語、その切なさや喜びが、いちどに胸にあふれてきた。

恋の諸わけのわからないままに、人間のかなしさ、いとしさを、私は人生のはじめにまず人形によつて教えこまれていたといえよう。

あの人形まわしの箱の中から取り出して見せられた数々の恋の魔に魅せられて以来、私は人間をこれほどなつかしがる性質を植えつけられ、恋に飽くことを知らない女の性を身にまといつてしまったのかもしれない。

あの箱こそ、私にとっては恋の重荷の象徴だったのだ。

あの箱の中に立ちかえり、私はあのおとなしい人形たちの恋の話にもう一度耳をかたむけてみたい。そして、あの人形たちに、いのちをふきこむことに一生を捧げている人たちの生活にも触れていつてみたい。

そんな想いが、いつのまにか夜となく屋となく私に取り憑きはじめていた。

そうしたある日、東京から京都へ向う新幹線から途中下車をして、私は名古屋に降りたつてゐた。ふと見た新聞に、その日から二日、名古屋のT劇場で、文楽が公演されてゐると出ていたからであつた。

東京を發つ時は、からつとした小春日和だったのに、東海道を下るにつれ、いつか空は曇ってきて、名古屋に降りた時は、今にも泣きだしそうな冬の曇天が、重苦しく垂れこめていた。

駅から劇場へ車でひとりまっ直ぐ向いながら、私はもう長い間、人形芝居を観ていなかったことをふりかえった。

物を書くことを仕事にしはじめて以来、それでも、一年に一度や二度は、東京に文樂がかかるのを待って、のぞいていたのに気がつく、ここ二、三年、ついつい忙しさにまかせ、人形に逢っていない。それほど、自分の生活が埃にまみれていたのかと、自分の暮しをふりかえりながら、まるで旧い恋人に逢いにいく時のような不思議な心ときめきが湧いてくる。

「T劇場で何やってます」

初老の運転手が訊いてくる。

「文樂よ」

「へえ、そうですか。まだ、あんなもの客があるんですか

梅屋敷

白粉気のない小さな顔はまるく、一重瞼の心持ち吊り上った目の上に、薄い眉が煙り、鼻も唇もつんもりと小さい。引きつめてまとめた黒髪のゆたかさも、白衿の間から

ねえ」

「あなた、観たことないの」

「へえ、子供の頃、一、二へん見ましたけど、さっぱりわかりませんなあ」

「結構入ってますよ。若い人だって東京じゃ入ってますよ」

「そういうもんですかねえ」

私より年輩に見える人なのに、もう、こういう質問をする人が多くなっているのかと心細くなりながら、劇場に運ばれていく。

車を降りると、それまで持ちこたえかねていたように、さっと雨の冷さが頬をかすめていった。

文樂のポスターは目立たず、若い華やかな娘たちの群がいやに目立つと思ったら、劇場のあるビルの入口に大きな宝塚の公演ポスターがはりだされていた。

エレベーターに後ろから押されるように乗りこんだとなん、あらっと、小さな女の声が私の肩先にした。

すつとぬきだされた首の細さも、どこことなく古風な中に一種のなまめきが匂う。藍大島の撫で肩に琉球紅型の一越の羽織をのせた華奢な人は、すし詰めになったエレベーター

の中で、壁ぎわに押しつぶされそうになっていた。

とっさに思い出せないその人とかかわりあいを、胸の中で問いめぐらせている私の表情を上目づかいに見て、女は細い顎を首にひきつけるようにして微笑を洩らした。そのとたん、右の上の八重歯が小さな唇からこぼれ、私にひとつの佛をはっきり招きよせてきた。

「しずかちゃん」

と、私が目をみはって問うようにつぶやいたのと、

「長いことでした」

とその人が小首をかしげてうなずいたのがいっしょだった。

小林静香、私たちは、しずかちゃんとおしいちゃんとも呼んでいた。子供の頃から、きわだって濃く多い髪を日本人形のように肩先までのばして、ぶつとりと切り放ち、前髪は眉にかぶさるくらいに下げられていた。小刀でえぐったような、切れのはっきりした一重瞼の中に、いつでもせいっぱいに見開かれた黒目が濡れていて、じいっと正面から人の顔を見つめる。

いちまさんのような子じやというのが、静香ちゃんの表現につかわれていた。いちまさんというのは、市松人形のこと、私たちは子供の頃、抱き人形でも、姉さま人形でも、ひとしなみに「いちまさん」と呼び慣わして愛称にしていた。

人形のように可愛いといわれながら、静香ちゃんは脚が悪かった。どちらかの足を心持ちひきずるようにして、肩

をつきあげるように振りながら遊び友だちの跡を追う姿がいじらしく、わんぱくな男の子たちからも、何となくいたわられ、これれものように扱われていた。

眉山の山ぎわに近いこちんまりした黒板塀の家の軒下に、小さく浄瑠璃と琴の指南の看板をかけているのが静香ちゃんの家だった。黒板塀ごしに見越の松がのぞき、早春になると松のかげから、千代紙細工のような可憐な花をびっしりつけた紅梅と白梅の枝がのび、呼びかけるような匂いが人の足をとめさせた。

浄瑠璃は、静香ちゃんの母親のおせいさんが階下で教え、琴は、目の見えない静香ちゃんの姉さんの芙美さんが教えていた。

芙美さんと静香ちゃんは十七も年に差のある姉妹だったが、おせいさんは、静香ちゃんの母とはうなずけても、芙美さんを産んだとはとても思われない年齢不詳の怪しい若さを保っていた。

子供たちは大人の話の聞きかじりで、静香ちゃんの黒板塀の家を「しょうたくさん」とか「梅屋敷」と呼び、おせいさんを「おてかけさん」とか「おめかけさん」といつていたが、妾宅も妾も手かけもその意味を知って喋っているわけでもなかった。

私の物心ついた頃は、おせいさんは弟子はほとんどない様子で、専ら、二階からお琴の音が洩れていた。

お琴の音につれて、梅の花びらが、はらはらと舞い落ちてくる下で、かむろのような静香ちゃんが、ひとり手まり

をついているところなど、子供心にも絵のように美しいと目に焼きついたものであった。

六つの年から、私は一まず英美さんに弟子入りしたものの、男の子のように戸外で遊ぶのが好きで、一向にお琴のお稽古に身が入らない。ようやく、自分から、通うようになったのは、小学校に上って一年もたってからだった。それから五年ばかり、ほとんど毎日、梅屋敷へ通った。

そのうち、日によっては階下に男の声が聞えることがあり、太樟の三味線の音がひびき、男の声で浄瑠璃を語る声力が強く二階まで上ってくるがあった。お琴のおさらいが終って帰る時、よく中庭に面した下の座敷へ呼びこまれ、おせいさんからお菓子を買ったりしたものだが、そんな日は、子供心にも足音をしのばせるようにして、声もかけず、玄関へまっ直ぐ出る。

それでも、襖をとりはずし、簾や、簾障子にかえた夏の日などには、浴衣姿にくつろいだたくましい初老の男と向いあつて、これも派手な縮緬浴衣を思ひきつて衿をぬいて着たおせいさんが碁盤をはさんでいたりする姿をよく見かけた。

その人が静香ちゃんのお父さんで、おせいさんの旦那だと、ませた姉弟子の女学生が教えてくれたりもした。

「うち、もっと、ほんまのことよう知ってるわ。あの旦那はんなあ、うちらのお師匠さんにも通うてきとるんやつてよ。ほなけん、静香ちゃんはんはちんばやろ、お師匠さんかて軽いちんばやろ、親子やもん血は争われんて、うちのおば

あちゃんがいうとった」

したり顔でそんなことをいう、もつと年上の姉弟子もいた。

さまざまな噂や憶測につつまれながら、女世帯の気の弱さからか、おせいさんも英美さんもおとなしく、ひかえめなので、町の人々はかげのことばほど面とむかつてはさげすみもせず、子供たちを稽古に通わせてはばからない。

梅屋敷に通う旦那が、昔の藍大尽で鳴らした由緒のある大木家の当主だということも、目に見えない女世帯の強い後楯になっていたのだろう。

「ほんまに長いことでした。でも、御本はたとと読ましてもろてます」

静香さんは低い声で私にだけ聞えるようにいう。その間にもうエレベーターは劇場のある階に止っていた。

外に出ると、あらためて私たちは向いあい久闊を喜びあった。指を折ってみると、もう三十年近い歳月がふたりの間には流れ去っていた。私より数歳年下の筈の静香さんも、もう四十には手のとどいてる筈であった。

化粧気のないせいか、皮膚がかえって瑞々しく、衰えを見せていないので、三十を二つ三つ出たところといっても通る。

「おつれさんがおいですか」

「いいえ、今日は思いついてひとりで来ました」

「切符は」

静香さんに訊かれて、私はまだだと答えた。

「ちょっと、あの喫茶店で待ってておくれやす」

ロビーの向うに、すし屋やレストランの出店と並んでいる喫茶店を指さしていった。静香さんは私を置いて小走りにどこかへ駆けていった。

せまい喫茶室は開幕前の待合わせの男女で込んでいた。

ようやくみつけた窓ぎわの席に坐ると、目の下に、雨に煙った町が広がっている。

まもなくプログラムを手にして静香さんが引きかえしてきた。

「今日はよう入ってます。やっぱり、紋十郎さんが文化功労者になられたことがすぐ影響してくるんでしょうね。師匠は、何でもええ、世間のお人が、人形遣いで人間国宝とか、文化功労者とかになる人間は、どんな顔してるのやろいうて、見に来てくれるだけでも、人形芝居のええPRや、いわはって笑ってますけど」

「師匠って、桐竹紋十郎さんのことですか」

「はあ、私、今、しょっちゅう師匠のところにさせてもらて、お話聞かしてもってますの」

静香さんのことばには、故郷の訛に、京ことばと、大阪弁がまざりあって、独特の、やんわりした、それでいてまといつくようにねばっこい色気のあるものになっている。

帯の間から小さな薄い懐中時計を取り出し、掌の中でちらりと確かめて、

「まだ、三十分ほど間がありますけど、ちょっと楽屋のぞ

いてごらんになりませんか」

と誘う。

「お席は、ええとことときましたから、ゆっくりはいらはって大丈夫です」

「どうも……でも久しぶりですから、少し、あなたとお話してたいわ」

静香さんは袂を人形のするようにさりげなく口元にあてて、ほんと、恥ずかしそうに笑った。笑うと幼顔が口もとからよみがえってくる。

「お恥ずかしいことばかりで、何もお耳に入れるようなこととあらしません。でも、母や姉が生きてたら、どんなに今日お逢いしたことを喜んでくれますやろと……さっきから思うてました」

「お師匠さんは、いつ……」

「終戦の翌年、美馬の山の方でうなりました。もう戦争の終り頃は、お稽古も遠慮して、鳴物いっさい鳴らすことならんいう感じでしたし、あの人からお琴を奪ったら、もう生きててもしかばね同然ですもの、見ているまに軀が弱って、物も食べたがらんようになってしまいました」

私の臉に決して弟子たちにつきつい声を出すことが出来なかった盲目のお師匠さんの黄昏の梨のような面輪がよみがえってくる。

お師匠さんの目はぱっちりあいたままだったが、その黒い瞳はふたつながら澄んだまま、物の象を映しとる力が奪われていた。それでも、ぼんやり、物の色だけは濃んだ沼